

The Magician: William Somerset Maugham



紀田順一郎 荒俣宏
責任編集

世界幻想文学大系 ⑨



魔術師 W.S.モーム
田中西三郎 訳
The Magician: William Somerset Maugham

国書刊行会

魔術師

昭和五〇年七月一日印刷 昭和五〇年七月一五月初版第一刷発行 昭和五五年八月一日第二刷発行

著者——ウイリアム・サマセツト・モーム

訳者——田中西二郎

発行者——佐藤今朝夫 発行所——株式会社国書刊行会

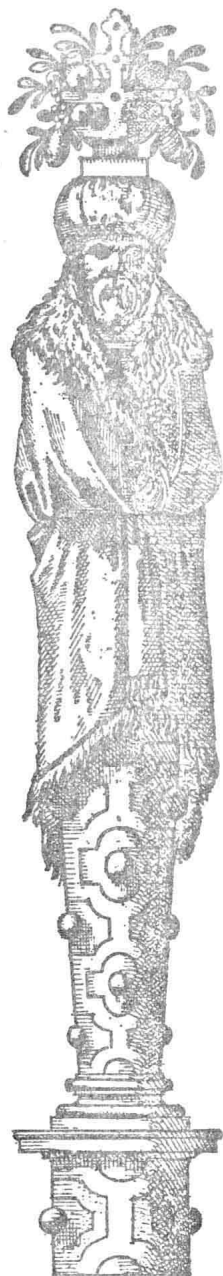
東京都豊島区巢鴨三―五―一八 郵便番号一七〇 電話〇三―九一七―八二八七 振替東京五―六五二〇九

造本——杉浦康平＋鈴木一誌

印刷——セイユウ写真印刷株式会社十凸版印刷株式会社 製本——大口製本印刷株式会社

定価——二、〇〇〇円

●—落丁本・乱丁本はおとりかえします



田中西二郎 たなかせいじろう

一九〇七年、東京生れ。

一九七九年、東京にて没。

東京商大卒。専攻 英米文学。

主要訳書——

メルヴィル『白鯨』一九五〇年。

ブロンテ『嵐ヶ丘』同年。

コンラッド『青春』一九五一年。

フォースター『印度への道』

一九五二年。

グリーン『情事の終り』同年。

以上新潮社。(ブロンテ、

コンラッド、グリーン作品は

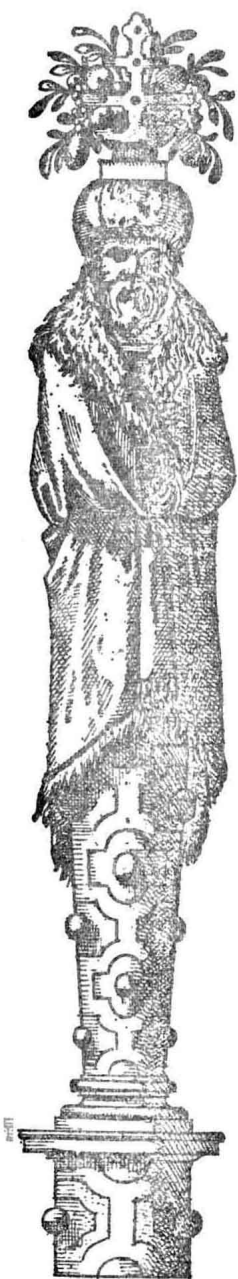
現在同社文庫にて刊行中。

メルヴィル作品は同文庫近刊)

グリーン

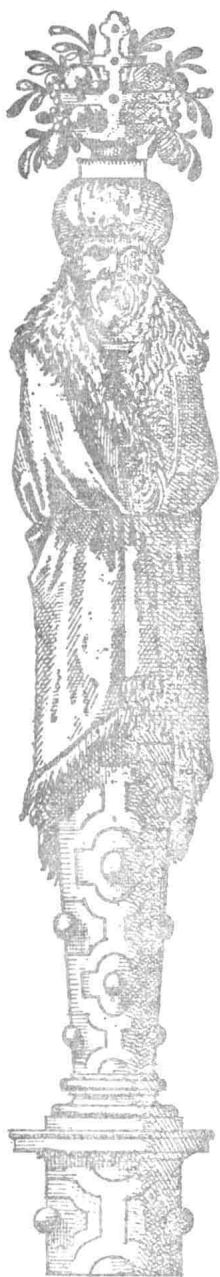
『おとなしいアメリカ人』

早川書房 一九五六年。





魔術師 ウィリアム・サマセット・モーム——田中西二郎訳





目次

8——魔術師
ウィリアム・サマセット・モーム

8——第一章

20——第二章

36——第三章

64——第四章

78——第五章

106——第六章

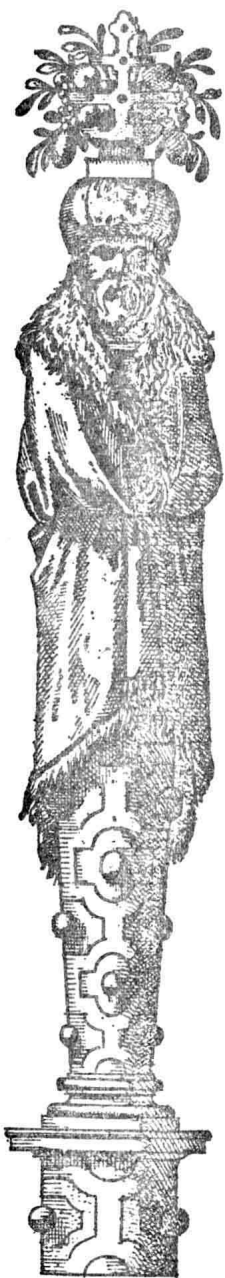
118	第七章
142	第八章
174	第九章
200	第十章
220	第十一章
244	第十二章
270	第十三章
298	第十四章
326	第十五章
338	第十六章

370 ———— モーム文学における“オカルト” ———— 田中西二郎





魔術師





アーサー・バードンとポロエ博士とは、無言で歩いていた。ふたりはブルヴァール・サン・ミシエルのレストランで昼食をすませて来たところで、いまリュクサンブール公園を散歩しているのである。ポロエ博士は猫背の肩を落し、両手をうしろで組んで歩く。多くの画家が、このパリ第一の名園を通じて、彼らの美意識を表現しようとしたのだが、博士は、それらフランス近代の巨匠たちの眼を借りて、目前の風景を観ていた。草の上には落葉が散り敷いているが、その蕭条たる凋落のさまも、ここに展開している巧緻を極めた人工美に、一点の自然の趣きを添えるまでにはいたっていない。木立は巧みに布置された灌木の茂みにとりまかれ、茂みはまた整然とした秩序ある花壇をその周囲にくりひろげる。だがその木立も、なぜやりに伸びるがままに枝をしげらせたものではなく、あたかも彼ら自身が造園家の美的意図を意識して、その完成を助けているかのようである。いまは秋で、樹々の多くは紅葉していたが、すでに葉の落ちつくしたものもあった。花も大かたは凋んでいた。なかば荒れ寂びれ、なかば繊巧を衒った気味のあるこの庭園は、すでに盛りをすぎた浮気女が、おとろえかけた艶すがたに粉黛を凝らして、人目を惹こうとする棄鉢な装いを

思わせる。そうした女たちの落ち着きのない浮き浮きした嬌笑のぎこちなさとわざとらしさ、移ろいやすい青春の、もはやとりもどす術もない魅力をつなぎとめようとすると、あわれにも都雅で嬌冶なたたずまいを、この苑ドは持っている。

ポロエ博士は、うそ寒い思いで、その病弱な身体に、厚い外套を、びったりとまとい寄せた。彼はこの外套を夏でもなかなか脱げないのである。この人の生涯の最良の部分は、診療医としてエジプトで過されたので、ヨーロッパの夏の冷気は、その血をあたためるに足りない。ふと思ひ出は、あのアレクサンドリアの街のけばけばしい彩色を、一瞬、彼の脳裡にひらめかせた。と思うと、たちまちまた故郷へ帰る渡り鳥のように、生国ブルターニュの緑の森や、嵐に打たれた浜辺へと、思ひ出は飛びかえった。彼の茶色の眼には思わず憂愁の薄い紗のような翳がさした。

「ここで少し休みましようか」と彼は言った。

ふたりはめいめいに、麦藁を座席に敷いた椅子をとって、キュピッドの泉水と呼ばれてリュクサンブールの華麗な巧芸美に点睛の趣きを与えている八角形の池のほとりに、腰をおろした。日ざしはややあたたかみを帯びて来て、そこから見渡される風景の粹をなしている樹木も、黄葉が金色に照りはえて美しい。石の欄干おぼしが池畔にめぐらされて、花壇には眼ざめるばかり色とりどりの秋の花が咲いている。二人の視野の一隅にはサン・シュルピスの低くうづくまった、異趣のある塔がみえ、また別の方角にはブルヴァール・サン・ミシユルの建物の、高低錯落とした薨が望まれた。





宮殿は灰色で、堅牢な建築である。乳母たちは、田舎風の白い頭巾をかぶっているのもあれば、パリの「ばあや」に特有なサテンの飾りリボンをひらひらさせたものもあるが、みなおとなしく赤兒とも二組ずつに並んで、乳母車を押して歩きながら、何やら話している。派手な色の服を着た子供たちは、輪をころがしたりこまを廻したりしている。ポロエ博士は、それらの子供たちを見ているうちに、思わず唇をはころばせて微笑したが、その微笑はまことにやさしくて、亜熱帯の太陽に長年さらされた血色のわるい瘠せた顔が、たちまちにして一変した。彼はもはや頬のこけた、半白のうすい顎ひげを生やした、風采の貧弱な小男ではなかった。平常の彼の疲れた表情が、ひとなつこい、情味ゆたかな微笑のかげに、消え失せてしまったのである。くぼんだ眼も、思いやりのある、しかも皮肉たっぷりな好機嫌でキラキラと光った。一人の衛兵が、オペラ・コミックに出る盗賊の着るようなロマンティックな外套に、スペインの警官に似た庇帽アルダブリルといういでたちで、通りすぎる。青服の電報配達夫が数人、ひとかたまりになって、かじかんだ指でスケッチをしている画家をとりまいて立っている。あちこちに、だぶだぶのコールテンズボン、窮屈な上着につば、広の帽子——ミルジュール・１の不滅のロマンスのなかから歩きだして来たような学生たちがぶらついている。もつとも近頃の学生は世間からばかにされるのを気にする傾向があつて、ブレイクマンズバ里紳士らしい山高帽子に恰好のよい上着すがたで歩く連中が多くなっているのだが。

ポロエ博士は流暢に英語を話して、ほとんど外人らしい訛りを感じさせない。しかも、その言い廻しが凝っているのは、彼が会話

にも熟達しているが、英文学の古典の造詣も深いことを物語っていた。

「ところで、ミス・ドーンシイはいかがです？」彼は友人をかえりみて訊ねた。

アーサー・バードンは微笑んだ。

「ええ、べつに变りはないようです。今日はまだ逢っていませんが、午後にはお茶のときに画室スタジオで逢うことになっています。それから晩には、二人であなたと『黒犬亭シン・アール』で食事していただくと思っています」

「それは嬉しい。しかし、水いらずのほうがいいんじゃないやありませんか？」

「昨日、駅で逢って、一緒に食事をしましてね。六時半から十二時まで、のべつ話しつづけたんです」

「というよりも、お嬢さんが主まに話して、あなたは幸福な恋人らしく、楽しくそれを傾聴したんでしょう」

アーサー・バードンは、まだバリへ来たばかりであった。彼はセント・ルカ病院の外科医員で、おもてむきはフランス式の手術方法を研究するために来たことになっているが、本当の目的はむしろマーガレット・ドーンシイと逢うことであった。彼はロンドン医学界の外科の大家連から紹介状をもらって来て、今日の午前中はすでに市立病院シテック・ホスピタルへ見学に行った帰りである。市立病院の手術担

・アーサー・ミュルジェール。一八二二—一八六一。フランスの作家、詩人。





当者は、今日の来訪者はイギリスでも相当の腕利きとして評判のある大胆有能な外科医だと、あらかじめ注意されていたので、まるで手品と間違われそうな離れ技をやって、遠来の客の眼をおどろかそうとした。無口なアーサー・バードンにとって、外科医術は、他人を傾聴させるだけの華かさで語ることでできる唯一の話題であった。他の医師の技術の優秀さを認めることにかけてもすばやくて、その手術方法にはフランス人らしい鬼面嚇人シヤウクニヌムがあることを、彼の犀利な眼光はみのがさなかったが、その豪胆、的確な手さばきは、彼の興奮をさそうに足るものがあつた。昼食のあいだじゅう、彼はその話にはばかり熱中したので、ポロエ博士もまた、記憶のなからエジプトで実見した一そう驚異的な手術の実例を呼び起こして、それについて語つた。

博士はアーサー・バードンが生れた当時から、彼を知つていて、事実、もしエジプト太守イスマイル・パシヤからの突然のお召しさえなかつたら、アーサーの出産に立ち会えたものを、と残念に思つたものである。だが、アーサーの父なる近東の貿易商は、ポロエ博士にとつては無二の親友であつたから、したがつてこの青年が、彼の助言によつて彼と同じ職業に就き、しかも彼にはついに達せられなかつた抜群の手腕をさえ認められるにいたつたのを見ることは、何ともいえぬ嬉しさを彼におぼえさせるのであつた。

偶然に自分の人生行路の途上で出会つた人々の性格に関心をもちすぎるがために、自分自身の立身のためには、あまり大きな野心を抱くことができない——博士はそうした性情の人であつたけれども、他人が野心に燃えているのを見ることは、決して不愉快ではなかつた。アーサーがおのれの天職に誇りをもち、その自信と技能とに助けられて、その道の大家、名手といわれるようになる

うと決意しているのを見て、博士は満足をおぼえる。多方面のことに興味をもつのは、その人柄に魅力を加えるものであるけれども、同時にその人を弱くする傾きのあることを、博士は知っていた。先輩をぬきこんでるためには、おのれの限界をまもることが必要である。それ故に、博士はアーサーが、多くの面で狹隘であることを遺憾には思わなかった。文学や芸術は、彼にはあまり意味がなかった。また趣味的なさまざまの些事に拘泥するたちでもなかった。社交的な座談は得意でなかった。人なかでは、ほかの連中のおしやべりを黙って聴くだけで満足していて、特別にハッキリと話せる事柄でなくては、座談の仲間入りをしたという誘惑を感じなかった。非常な勉強家で、病院での手術にも、解剖にも、講義にも努力を惜しまず、英語だけでなくフランス語やドイツ語で発表される専門の論文も、せっせと読破した。たまに一日の暇があると、かならずサニングデールのゴルフ場で日を送る。ゴルフには熱心で、技倆も優秀であった。

だが手術台前にすると、アーサーは人が違ったようになる。社交場裡では、自分のわからない話題については話をしない小心翼翼さと、好きでもないものを口さきで褒めることのできない生真面目さとの持主であったが、手術室の彼は決してそんな斟酌をしなかった。むしろ反対に、異様なまでに精気潑刺として、おのれの力に自信が湧き、力をたのしむ風情ふうせいさえあった。どんな不測の事故にも狼狽することがない。手術に対しては的確なカンがあるらしく、手と脳とが、ほとんど自動的と見えるほどに俊敏にはたらく。ためらったり、失敗を怖れたりしたことがない。その勇氣にふさわしく彼の成功ぶりもめざましくて、いずれ彼の世間的な



魔術師



評判も、専門家のあいだですでに得ている噴々たる名声に匹敵するものとなることは明らかであった。

ポロエ博士は砂利の上に、ステッキでとりとめもない模様を書いていたが、やがて、人なつこい微笑をみせながら、「いつになっても、人間性というものの意表外なことに、驚かすにはいられないね。きみのような男が、マーガレット・ドーンシイみたいな娘さんに、そんなに深く惚れこむというのは、実に意外の感に堪えん」

アーサーが答えないので、ポロエ博士は、自分の言葉が相手を傷つけたのではないかと心配になり、あわてて説明した。

「わたしがマーガレットを、実に可愛らしい令嬢だと思っていることは、きみも御承知の通りだ。美しいし、しとやかだし、同情にも富んでいる。だが、きみがたの性格は、チョークとチーズ以上にさえ違っている。きみは東洋生れで、少年時代を、千一夜物語の舞台のまんなかで過したにもかかわらず、わたしが出会った人間のなかで、きみぐらい現実的な男はいくらいだ」

「あなたがぼくを融通のきかない男だとおっしゃっても、ぼくはちっとも構いません」アーサーは微笑して、「正直に白状しますが、ぼくには想像力もユーモアのセンスもありません。平凡な、実際の男で、ただ自分の鼻のさきに見えるものは、極めてハッキリと見えるのです。鼻さきといっても、幸いに、ぼくの鼻はなかなか長いのですよ」

「わたしは日ごろから、想像力がなくては、恋をすることはできんと思っっているのだが」

またもやアーサー・バードンは返事をしなかったが、じっと前方をみつめている彼の瞳には、異様な表情があらわれて来た。それ